

表（エ） 会館使用料モデル

会館使用料モデル①

部屋 (㎡)	使用料		
	午前	午後	夜間
25	600	600	600
50	800	1000	1000

会館使用料モデル②

部屋 (㎡)	使用料			
	9:00~12:00	12:30~15:15	15:30~18:15	18:30~21:30
25	600	600	600	600
50	1000	1000	1000	1000

表（オ） 利用率、利用モデルによる年間使用料収入の試算



利用率(%)	会館使用料モデル①		会館使用料モデル②	
	金額	回数	金額	回数
10	240,900	329	321,200	438
15	361,350	493	481,800	657
20	481,800	657	642,400	876
30	722,700	986	963,600	1,314
40	963,600	1,314	1,284,800	1,752
50	1,204,500	1,643	1,606,000	2,190

表（カ） 損益分岐点利用率計算（年間事業収益5万円と設定）

設定額	内容	損益分岐点利用率(%)	
		モデル①	モデル②
300,000	(a)+(b)	12	9
550,000	(a)+(b)+(c)	23	17
1,050,000	(a)+(b)+(c)+(d)	44	33



そこで、それぞれの会議室利用率と時間帯 - 使用料モデル設定の場合の年間使用料収入を計算すると表（オ）の通りとなります。

使用料収入以外の事業収益を5万円として、損益分岐点利用率を計算すると表（カ）の通りとなります。それぞれの設定額を達成するために、最低限必要な利用率（損益分岐点）が示されています。例えば、モデル②の場合、ランニングコ

ストをカバーするためには、9%、減価償却費も含めてカバーするには33%の利用率を確保する必要があります。それにもとづいて色分けしたのが表（オ）となるわけです。

一番濃く色分けした部分は、会館運営費と水道光熱費の合計額（いわゆるランニングコスト）の30万円に、モデル①の場合は届きませんから、単年度でも赤字になることを示しています。